美濃
舊衣

八丈縞談

四

特別
へ13
3646
4

美濃舊衣八丈綺談卷之四

東都　曲亭馬琴編演

巽為風

朝煙霞

斧丈八ホヘ。ゐるゞ渚平が忙しく。撫殺と齋しく小川の向ひへ走去る。その故を
ちらゝざるべし或八汗ア。或ハ呆ルとて。紙等と半日ぢり。日をてや酉ゑ流む
しろ。渚平八一捉の轎を早し。岐義をゐるくゝ。まつ。滿面ゑ笑をながら。轎を
そゞもく樣ざゐゑ。鄭の框へ著さしく。垂る蘭簾と掲ゑべ裡より二八ぢりゐる。
いと腦廚し未通女が貝紙泣腫して。當下渚平ホとゐゑ斧丈ゑ二人の
嚮ゑ心いそしさゐゑ緣由を告ざゑべ。研しくゐゐゑ。そハ渓やゐ。説ちくせん。
丈八ハ足紙取ゝ。て。猛丈をとゝせよ。橋只ひとつゐゝ。て。二百錢ハ。とくゑ。
水ぢゐゑ。ぢゐゐくしくゝ。時紙殺ゝ。ゑ。清水の兼臺ゐ。落ちと

これのみなる随にとりなせし岐蘇ハ猪を殺すとも、そのまゝ庖福へ杠入て由を
猫まで下りて来て、正首に浮ぬお駒をいそぎて奥庫に連て
中庭なる便室の障子を閉て誘引つゝ、尋ねを丈八もさすがにかくところなくて
傍の目を間ぎらし注す腕のあらば、尻につきて、おるが圍居に入りしかば猪平ハ
ひとりのみ、やよ斧が事成ては丈八ともかくに遂ぐも及ばず、吾いと貪しくに
とて前妻四に産しる女子ひとりありけれど、妻ハ産後に身まかりて、貧しく
術もなければ、襁褓の中に棄しかバ、この川乃前面なる尾花才作に養はれて
その名を駒と喚びつ。今や二八の年にもなりぬ。さるほどに吾倚の跡て
貨財に物ハ欲しみをおのれひとりなる男児、またもおさなくも世を去りて子
宝のこころに任せず、むなしく悔しさのみありける、守の嚴命端午に生れし
子を忌ひて棄ることを禁ぜられたり。子を捨るものありて先非を悔て今更に

とり復さんとおもふもあらバ、此度ハ格別にその外ハ宥らる棄る年の要少り
後ひ養育償を形のごく、中ハ親に覚ひて廻その子を乞るべしと令あり
されし夫の賜かる便宜ゑぬぎりせバ、女児にしく女児にあらぬ女児をいそで
女児にせん為ハいそげと忙しく猪殺を齎しつ、猪むひにく嬌姣催ひて、やがて
尾花が宿へ赴き、守の仰ごとに着ていひぐゑ述富妻那が辭めて說
しかども渠奴も亦さるものなれバ、一條でふらけ引ぎ、守の御ふ負にあらぬ旨と
正しき親子の證據なくてハさりとても信じがたし。證據やあると詰らまくて、吾
さるにても思ひ笑ひいうるまでもなけれど、某女児を棄しときハ、猪小牧馬の
模様ある夾衣を着せたりし。是その證據一なり。ともののみならず彼袷の襟紉に
結びそえし護身袋にハ、臍帶と金山彦の神符を納たり。その證據一なり
お駒が左右の乳乃間に大きやかなる黒子あるべし。某が胸毛の中にも大きやかなる黒子

ありともぞ正しき親子の證据疑ひあらんやと襟をひらきてみせしかば才
佐衛門は辭みて絆せられて就中何岡の浦でとにかくにかへり婿取るゝ女
子なり。彼才佐が女房は名を小枯枝と呼ぶもかゝる時に鬼薊三五兵衛と殊に
賊目立貪りしかどもその子を棄てゝあらばこそかくして孚せ今まであはせのよき隨ふ
恥をおもはで親と名告りしとて他人といふことを守の心なりけるにありせば
いかで輙くうけ引べきぞ我思ひて争ぬ良人を閣てかくてはいかでか得らるべき。
假初の畜生犬猫でも押て可愛きものなるに況やとまれ襁褓より養ひとりて
十六年人となしぬ右の我人にませし夫婦が丹誠養子あはせたる子なれ
婦と初穉よりいひかはしし時し給ひてこの春は妹伎の盃させんとて准後を豫て
よりトし置その日もちかくなりぬと定めてまご深きぬ寓息にやの妖媚筆をも
かれあはれぬ恨そのかなしきは彼いかにと傷痛くかれ口説ば女子どもは乃

流石にお駒は情由をきゝて然り謂ば我が子なる才三郎と婚姻の日の
近づけば妖媚そそのかしと禍真中へしかけるれど、とあるべきをもなくこそはかゞる
才佐は怨ありてさんなくて渠奴が門へ子を棄ちるも悔しきに美濃の尾山の
古墳にて渠奴が必死を救ひしとあり。縁由は箇様々々と一角がいへ尾花が
こゝろへて其にかちとなる首尾を説きしに、お駒は今さらや人となりては
此かは彼しらで此と斉しく浅墟なるもありける、さらりと尾花夫婦は原是
他人世に亦おん身が夫とのみ才三ひとりに限らんや。吾儕彼等は由なし。今
五七日遅りせば父が古主の仇となるべしおん身は遂に阿容々々と才三郎が妻は
さぞ後悔してもちがふならん。婚姻の准後に歯を染させんと思つる竹斎が
よくこそあれくえのなしで復せしにてあるぞ親子が幸ひなり。さはれ
こそあれ小枯枝が恨の泣口説にき禁あへぬは守の嚴命濡ぞであるべき

言葉数ならでとりなしゝかど女児ねてくらんとおもひしかども。十六年養ひせしよ。心づよくもなるからば後は尾山の墳にて才佐がことゝに獲させし錢を返し養育價も形のごとく贖んとて齎せし樽殺を安排。八貫百の錢をとり出てこれらのよし縦迹も果ぬに。才佐ら縦左右へうち掉て。貯禄落たる浪人を侮りとがむるはどに金銭をもて人に説るぞ。そは貴人のうへにあるべし。こゝは初より利の為に葉子を捨て字んや。十六年の養育をせげに一日ふ縁絹てそひしるの仇さへまさるも皆是天のなす所守の命は背くべからず。其素よりまゐりて育し、お駒故なく其許へ久しくあるよし後は酬を受んよりまゐらしぬるをはた。楮殺この錢も又何にかはせん。そのまゝかへして後を敦圍あらく回答つ。受納もせず気色へおもしく屡泣妻どもゝそれとして綺羅やかなる衣どもを三襲あまりとりて出させ、是はお駒が柳の衣のまゝにとて外は何まゝ欲とせよおあらかじめ

あらせよ溜とこゝよりの贈遣なるさめさる泣を。とひつくを禁あへぬは愈怒り涓やの腹立がことなるまへ。いとあひがたき饗応少く。ならかりし得はつけ先親のこゝろを子はあらかでうち泣すかり辞別。才三郎は今更に鰥に離るゝ水母乃ごとく彼も此も挨ひさげよいふをとつくるぬもいれど、目は涙の様にてぞさて水でるゝ色がこゝろけれど。関の小川のなかしあひて濾よりふ出船入船とぞめをあへず留りをもなせど。首尾十二分でねてくろりぬ。やよお駒是はこゝろ後妻なればもん男が為には則母之斧も実の女児とおもてぞくまるく海の人に元卅帶て根継少は齎こるの女壻とやそとよけも。家寡の志を立る浪人の婦になるかねは一朝の華金の草鞋でゝづねぞともと才三郎に百倍せし。佳壻は義もありさるにあらぞやとのとりなよ。左右縦信とつゝくまどは斧は直を果も果丈八を尻目にかけていたいぶせ。おぞどもに乱色には顕はさねど。こゝろ使よ女児あらぬもしまかけまでさえらかざりし

諸平が意中ハ
蘭奢待
女郎を買ふ
さづまの人
きるぐの
お東
丸屋
ところの底乃
ぬけ
お駒が意中ハ
杉三郎と
婚姻を
斧丈八が意中ハ
お駒
さんと
たつゑ
丈八
お駒
諸平
お駒どの
諸平
往時
しくく
現ぐを

人の齢は限りあり。千々の黄金を積むとも。子はまたと宝はなし。ゆゑにかくまでぞ愛しみけるは何ゆゑぞ。親たる子をなさるも過世の業因なるべく隠るゝもはかなしや。さて艶麗なる縹致なるにしもあらぬ腹も疼めずにかゝる女児を儲けり。今ぞ手にとりもますます鍾愛を精しかへ叮嚀に。人めづらかの陽炎白く底意ひとしく丈夫にも諸共に慰めなく。寿を延しつべし。お駒は袖の目ひき生まれし活る物なるを父母はありながら。実の親を知らざりし。しかす其の形なきに。譬へんようもなかりなり小さき歳に今茲は十七なりけり。思ひぬる身もすにかく世をかくは又紀男あひ神に佛に願言のかなひてけるはかりなく。実の親の親里へ立ち入る媒しとして悲しかのとの年来孕みたる二親は実の親を敵として。仇さより言号ら振上げ髪を育てるまで。諸共に生ひ育ちし。彼人ざ弟と中絶ん空結びなる妹を使ふ。いまやご枕へかへ鳴の水の音くへとはあらずへと墓るれめに待るとのひけて又伏沈ぬかくて斧丈八が思ふさぬぐに慮く。お駒に衣を被らへさせ物食しみづからもと老果敢なしくは箸もぬとらず才三郎がそのその絶て忘るゝ隙もなくはと暮し翌とみづからせば千筆をおくる心措しつ。人傳なりて月乃憂苦言居やうんよしなるに日毎に矮樓へ登りつ。川一條のあなたなる尾花が軒ちを眺め。河原面の便室へゆし彼人の出るやと仏彼処に月はあなに現人愚の天河年に一度のあふせどなる不憑きぬ袖の雨漂ちきを惜き形見の衣二つ三つ四つひさ縞ねにあまねるを抱き借然として泣にぞ。歎れはいとをと理りなき件の袿は才三郎と婚姻の晴にとて養母小枯枝が手づから縫て送りせる一對の小袖なる。今は稀なる稿と笑良八丈絹紋黄繊あかくく紋には桐裾には菊に蝶紋をへ染しられける。さぬ天丈の比迄も。八丈絹を唱志は八丈嶋より織出せし絹のるにはあらず尾張より出せし絹にその長

八丈なりしかバ是を八丈絹といへり。大納絹の長を定めて二丈六尺とせらるゝ迄ハ。
いと後の世にて。この比まではハ絹の長短おのおのその差ありといへども八丈絹ハ
殊に長かりし。云ハ播磨の飾磨紺武蔵の麻河内の調布陸奥の信夫摺狭布の
細布などに等しく。都鄙に名ある土産なれども。鄰ある国を胡越のごとく彼是
擊ことを問ふ戦国の最中なれバ。美濃人ハしばらく尾張の絹を購ふことも轉
うかりしが其ことを獲ることを又故あり。小桔梗が父牧村衛門がいぬる天文十五年の六
月に稲葉山にて身まかりしその比長男牛之助長通より。妹小桔梗に
贈りまゐらする父が像見の衣裳の中に彼絹一巻ありけり。こハ今ぬげる紀念なれバ
そがままに蔵めおきしを此の春子どもが婚姻の晴小袖にとて。それとぞ廻しぬ
三つに裁て子共等が好ままにせよとて下色に染ける絹一面ハ才三郎が小袖に刺立
二面ハお駒が裙にせしに。その色ハ黄纈にして。紋も摸様もかからざりし。かくまで准
構へく。二月廿六日ハ稀なる黄道吉日なり。この日ハ兄妹と背の盃をさせんとおもふに。
今ハそや幾日もあらねバ。お駒ハ先ッ歯を染よとて。一日小桔梗ハ鉄漿壷将来
子ッ角盥など大くさに執そへて。八丈絹もて製ける。お駒が裙の二ッならべてまゐらせ
けふの晴にとて刺著とりて被せける折。ひとりけぎ一件のことぞ来て
諸平にお駒をとり復さしぬ。その日その時才佐ハ楽が被ぬその為にとて新き
衣三襲あつらへて。齋しく遣せし。こハそや像へんよすがねとて豫てよりよし
あらかじめいろいろの衣の中に。仁田山紬の裾のあまりハ小褄木綿を綴とせしに
そのはじめ才佐が。こよなき絹と思賜はく。これ絹ハお駒に縫せし。小桔梗し
いなせしかり。彩異いかなる綴衣と。おのれが衣裳にせよとていふが怪しやめ。
せんかたなきこの衣ハ綾錦にもやまして。おのれが為にハ愛き物にこそ
つまへ裙に綴て但色の楮に牧駒を染しるハはじめおのれが一乗ら

付の襁褓に猿様の駒とゆかりて則お駒と油と木綿にその品々をこと
繰りとりとりて衣をとる。あんみも亦かくの如し。親ゆるさぬ親に孚をす二郎が妻と
なりぬるや不思議の縁の糸。ゆゑあるに天子夫婦心の誠小誠通て隔なく
ひとしかるべきとのひ喩さるるもあり。さるをびお駒はかなさとの。彼どもびをとゆく
ゆくを長ゝ元像ゝの衣今ゝに仇なるをそなるべくは花々陸もあらはしかけを日
ごとに楼に泣くゝとその心慰ゆ。ゆゑに元もるゆふるひびく
るゝはらぶ大人ゝ慈ゝまゝまさびゝめのどく彼人ゝ酬ゝあゝ親びゝをゝ元
問ゝ葉子ゝ学せゝるその人乃恩義仇なるをさをゆう。吾倍ゝ浦ゝ行束おゆと
ゝあゝまゝあびゝをとるどゝやゝひゝのゝはぬ哀を好ゝく彼人ゝ古主の仇と
憎さびゝ罵りゆゝゝさびゝ。ある隨ゝ不飽で金銭墻ゝる墻ゝゝ物体
ゝるゝとゝゝべゝを親ゝ恨むゝとゝの月乃悪業実の毋ゝ前をさびゝ又せゝとびゝるゝ

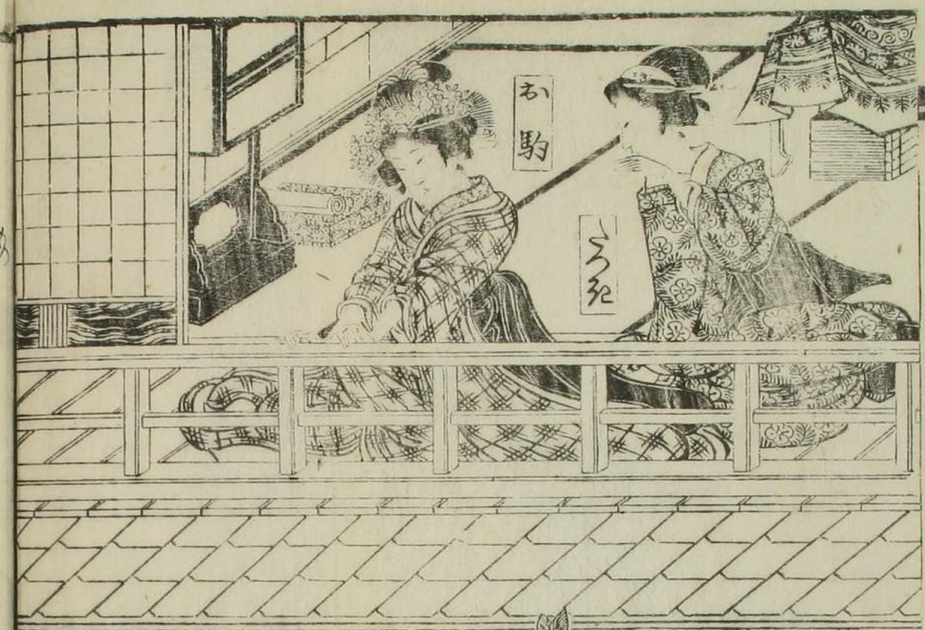
べゝ元ゝ。かゝる歎元と彼ゆゝ。ゝゝで憎ゝを思ゝとゝん不和と不破とゝゝゝゝ関の小
川を表裏自性留ゝゝゝる月ゝかひゝるゝゝ人倍ゝゝゝゝゝ唱歌ゝゝゝゝゝ
せんとゝひゝゝ元ゝ琴琴膝のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝ元鳴ゝゝ。十三弦の春の川琴のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
背後ゝゝ人ゝゝ元ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
才三郎ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
親ゝ傳ゝ。旦その意ゝ仕ゝゝゝゝ養育の恩義ゝゝゝ妹伎の縁ゝゝ仇ゝゝて。日
未ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

るをさるべくよいひこらへどう復世女児の為よ。婿と撰むと世の風俗親よ為にぬ
ふさう女ごこを「えとにを楽しげよ。琴拍撩を面の悔さよ。扨丈猫よ等死奴よ。
鬼の毛よ結ぶあだろうをこころ死送しく潜ゆうよまくくこくく来つるかあらど。
痛し死ハこぶ母そこと彼処ハ程ちろ死よ。音耗るぬハこころ殆ぐに腹こそ借さね
襁褓の中より。養育ちくろ恩愛ハ才三部と異ろうぬ。お弱ハ別の哀しさよ。
病ぐらしてやあくんぞくん折をあくべ坊ぐに宜ひとるよ。然止ぐく。
竊よこと来るめろう。父ようさせる命死禀ぐ。緒平ぐをちぐくををぐ庭
門より潜び入う。孫雨より挙登ようく後と面をあらとるう。才三部ぐ本
意ようあうぐのふべ死ろうをこをを限を。不義はて富栄るとも。物の報ひ有
ぐハ長死月日れ後と俟ろぐろひちうぐ死ぐと罵ようぐ礎を蹴る裸る
携るもあうく。引貌さをて同死拭ひ怒ようみる理う父ををあをうぐころ。

関の小川の流ハかうるとをいうでうかうり拾ぐ死実の親とうひうぐ。恩を後ろ兵
きのふ生ぬ親でを十六年親愛ちる死方ぐ女のちをその子ハこぐ夫いぐを
疎ちるけをを音耗ちくぬをとう死ぐハ流石る親の非を著をる仏て不孝ん
いう孫ぐ養父ハ不孝ん今の教死ちくを。浦嶋ぐ子の恨ぐ。はて
悔し死玉匣ぐうの親ハ力ひろうをとう甲斐ちを贅はく。死をとるひ決めつ。
日新まろ万の宮ようを晩ちん人の命とも。ちうでや父ハこぐ為ぐ。ぐそぐ
増ぐの。誰を。楽をとを憎よその高洗ぐ。毎ぐ耳ハ双ようちぬを智の
ふくう死ぐ。ぐひ。勧解も推辞も片意地の親ぐハ勝ん乃をちく。涙ぐ医ハ
いくを度魅ろ移てうくと。聴る空ぐ春の雁彼故事ぐ違ぐハ筆ぐ。ぐて如此
如此と言告ぐうくとぐ。ぐ何ぐて暮ぐ。ぐ伏ハ彼親ぐ在ぐ。ぐ。ぐを
軒ハんえぐう。川一條死万里の難かくまでぐひ沈む身を逆さをどる鯰のぐ。

罵らまても静まても仇ある受ね郎の拳撃殺されんハ本わるよそ只願しくれ疑をとそれくあるまじと一言ふ実白ゑつんせよくあわらバそこへ千僧の読経ふもまさる佛の来迎ふもまさりて尊き冥土の裏憑も二世の契りのよ安ぞと思さぞや。むづよしとされは親夫の膝よ伏沈む涙ハ昔も八丈の長き袂を絞るまでぞなかりける。かくさんの衣乃色あやしきれ卿二言よかなどもきせ才三郎ハ嗟嘆しくやをとて背を擦捺りまさるをおるべきハ思ひしかども日来猜るまで信かくれ斗ま疑ひをも一下しおわまのをことハともあるを二親の腹立てあしハ理りなるかなれども心ゆくれハあるじが貪欲そてる忽ちるを思ひなびひ只痛しきハおん身が苦労辛の為ゆへならさらふのみまた母ふをまよはしべ現煩悩の塵の世れ若ゝ積りて山鶏の雌雄峯上へ隔るとも縁し竭ぬ事ハあらんよりも数れよ時節移りて人よなかきを浮名やたたん思ひなわされりて病のかならずや退らんとおひあへざきまくもまたる忙しくやよ納

返へいうのありと携る袂を振払ひ再び携る袂撞退られて吐嗟と一声叫びはなく。身を仰さるまよ欄干に倒れかかりて楼より落るとおもへバ假寐の夢幻浮橋ゐ中絶て恍然として覚よなり。かかる折小厮岐飛ハあるじが例の性急よ挽残しる河岸の役をすも日の中よとりて全下よとおくふうちをおもひにせすなまその鋒果て半日あまり労世骨を且く休んとて伏くる松木よ尻をかけて。領の汗欲拭ふ折飃ゆやあらんぞこふ川の向ひよ塵埃起りて颯と吹風を諸共よその形状蝉よ似て蝉よりもちひさける虫閃と飛来つ岐飛が眉間の直を著く欲搔落さんとする程よ忽地つんぞぞろりかへりしかども向上る様よ夢れ行方を見ひせる。駒と面とを見合なりぞ。當下ハ駒ハやさしそよるへぞて寄村おめし。墓るれハ只夜よりて世よ憑きぬのるかぞ。かかる郎の怨を申るひ親ハいそぎなくうち腹立くとそてらん夜の川の風れ使ふまかをかくありそれとうらへを。



ちゃまわりくどく。偶〻使者の臣大さの小廝の中に。岐義は其性老実に辞さく。うるおりのうまべ相撲とき。ちゃのよ式編さべうをあらぶ。鞫に渠ところらく

機密の使を

さえんどとおりへど。流石うちはけおひ。あらもべ死とうら。孩見よりくまろびる目をつけて。挙動を窺ひつ。支に假托て

ちゃのびくに。物式とてせるでせーろべ。岐義はお駒本式いってゆ。ちゃーはあーん彼君吾倩に。あーくかく。城をうんせゆふこと業平に肖ざれ。當風骨逞しく。色の黒死を慕ひる。ちゃーべ。ちゃーもで美人の注文に。稱ひ月。僥倖ちゃ。ちゃけらもてる恋ちゃべとてをかくてを挿既の花。早ちゃくちゃおーべ妨あーんさもべ果報に寝て等。ちゃーろ。ぶに約べのこ生憎に人目ちゃくてい。ひーろ。隙にうもとどを。お駒が所要に人に。あべーずい。と信しく仕へーべ。お駒を岐義式憑ーれりのこと。とーにまで今に。只彼れの使に。相撲でやちゃ遍。

いくとせかのあいだのことくていてどとふ日紙送ぶ。そ
因果のそめゆえあ平紙虫の正なるう紙後とをなひ
あしたれ。かて今茲も春暮て夏水ゑ月の上流に寄ぬ。
不顕尾花才低。いはる比ゆうりうう。お駒を諸平よかへせ
ちゝ私のつゆうもと原兒守の命よりもとびうう〳〵よ
ちひ絶く。憾うれをとゝ人せ紙ゑ小桔梗ひとすく遠
憾さようちを忘きを。才三郎がその日より。拙き
ちうち紙理りえた慰めを田八恨よりをを炫ぎ有一日
良人よ對ひていよ。お駒を諸平ふ取ゝ色ゝ日ごろ
ふとゞも音耗ゑ紙。ところゆがさ紙ゆうゆ。才三郎と
云号て。婚姻の日さゝ定め紙。お駒がいうぬゆやある。

よりや一旦とり復きとを女子八家と嗣ゆうは。ちゝ
ゝゝ嫁らゝく。養育の恩よ報ひ好紙結ぶがあてあ。
人の信よゆるゝ人ゝく訪せあはゞそ。とのゞ紙ゝを
うち掉ア。會者定離ゝ仏の教ゆ八別れ始ゆ。
ゝ八ぬ人のゆうさよ。諸平八元来利紙対ゆ白物と標
的よ女思ゝとゝてゆるよりもゆ紙浪人の。ゆゞ子乃嫁よ
ゆゝゞ紙渠ゞ新紙鬻し比。ちゞくゝとゝ来ゆ。ゞ裁
迹ゝ住紙も近く川一條紙隔ゆゞゆ。胡越のごゝゆ
ゆゆる。恋情八且く論せゞ利の為よ子を棄て。又利の
為よ子ゝとり復を渠ゞゞ紙八人面獣心。駒ゆ然八月
をゞゞゆゝゞうも紙八ゆし才三郎八ゆゆ紙めゝは

あるとき人を恨み形ありて出ひもせん孫さうを女子ハ渠のそうて速に念を終て女にて人を矣をあるべしと〳〵ぞ〳〵小桔梗もかるるの丹ひとを出あるべと貌儼しく窘あるべをおるべ出ひ遠慮さ我いへ〳〵えいやいるべ若しるべ浩処を跫然と門逸を駁の人音して〳〵しく峰門めあり誰と同べるひげるべ小桔梗が兄牧村牛之介長通此度君命を兼て美濃十八郡を巡歴せしの叙を訪る尾花が退糧しく後ハ通家をとを主君憚を詣

るるとをうりしよいとめづらるを訪るを面目とまるをものをとあるべ親子ハ雀躍しく旋て上座を清待し寒暖を述を異を祝を賓主礼欵び大〳〵ぞ小桔梗ハるる羊父の臨終を給あるべるるさくよいひ出て物ぐるを蕭然るる。當下長通ハ父が後方を伺しるる才三郎とうらくんて。こハるべ怪であるけるを扶を兄郎をなるふけを。先君おまをるを日をさせる

我をけ生どを。通路我絶〳〵傷難を憚を故をを道三逝去ましくく。新君箕求衣を嗣多ハ憚の関乃戸を己を〳〵を閑しとちぞをるさをぶをてこの我一卒をりしるるるるるる私君命ハ他事をあるるぶ岱りや及ん邉鄙乃愚民動をを〳〵出生の時日を違くをの子を棄後悔をるをいとををる。君この

るる我歎せるるハ既を仁慈の嚴令わを〳〵を山里をすぐるハ業を編るをあを。あらんぞるるんをりて長通岡中我巡歴しく。限る下知我伝人をを仰を

よるるをかくのを。をるるを小川のををるるる坊賈渚平と称るくるめ。天文二年秋の比如此ここの艱苦を怪る我。浪人尾花才伝ぶ門ハ女児を棄るるをあり。頗を先非我悔歎けど。今を文を徳るを我折那ふるをまを守の仁政西尾

我ハかるるひをりるく。女児お駒をとり復せり。を曩を里正某甲ぶ称を

をりるく審を我をを。定めるくをのるをあるけんを問を。て才伝夫婦ハ

面目あれしく歎息し。かくるうつてそいひし。貢紙いくば如此そうの尾を繞ぶ
箇様こと猪平ち駒ぶ褌の蟯ちもうく告しくば長通も又嘆嘆しつ。れ以如
来つる時あるぶ親子ハ何ぞうの物ちいしさ面きとうりしとハ彼ち駒さきう復さとて
迷恨やうこうる死故ぶうんさうまとて必恨をあふること且ハ物怪の事ハ猪平ハ
いふめうぞうこうこと且紙ちうしあり。這奴ハその性貪婪の癖者うまハ舊
悪をあるぶ加ハ旗件の猪平ハ往時あるぶ小粉さてる芦月一角ぶ奴隷ぶそのの
母ハ一角ぶ妳母ぶうけまぶ假初の主後といふのうぶ鈴とをこうしで彼をの
女兒と拾ひしく養育し。才三郎ぶ妻せうぶこと禍紙釀さてるえいとを定るの
うしぶをを小腦紙拍く説喻ぶ。尾花親子ハ駿然と撃死ぶ呆ぶ且蔑て大ぶ
なる息紙吻死小拯校ぶ恩愛も。才三郎ぶ憂惜の絆を忽地絶果てぶめて
英多の笑てるぶく惑ひ頓ぶ釋しぶ怪しもぶ才三郎ぶ褌ぶ可の虫ぶう。才

他ぶ者を見とうしく件の虫ハいやる比因果増の壞ととりて年来抜くうしと
うれ。お駒ぶ養紙抜せ。その時渠ぶ堂ぶうし。出ぶる虫ぶ疑ひるし。捕くうしよと
いふぶせぶ才三郎ハ脅近ぶる扇ぶとりくさと厠紙とりおさ人ぶとる泡ぶ。
虫ハ忽地御と抵ぐ。厠紙投てぶ失ぶる。さまぶ駒ぶ樓ぶ。ひ労ぶ夢の
中ぶ才三郎をうてうしぶ。岐荒ぶ河糸ぶ休ひて。あ中ぶ虫の胸ぶ著と。ふま
排ひつぶうぶを。お駒と厠紙ハ共ぶ。ぶて此日のうぶて。あぶうりを
その時の違ぶりぶ不思議ぶる。却説尾花牧村ハ彼虫の事ぶよりて。物
語ぶ又長ぶうり。才他因果塚の崩ぶてる絆の蟯稽ぶ小ハ硯のうぶ。貢百
の古紙ハうぶ紙密ぶうぶ説ぶうぶて。件の硯とうぶ長通ハうぶ不稟て数
回賞嘆し。ぶ先君ハ顧ぶ。この硯を惜せのひ件の塚を浚しくうぶ出せと
仰せ公ぶ文練ぶうりてそのうぶ止ぬ。後ぶ件ぶ硯未曾有の古研ぶ新君

再てあん法のくぶ献るべきものよりて努和ゆくべきとて才伴君よ
納るかくて又長通に才伴に對ていふやう。あるといふ和漢の書籍とり
くしくぶるものいと博学小今才三郎が逐失ひ。虫を何とりえぬるに同じ
才伴貝式歩車何ども見ひ定めどもいま長通うち微笑さまして智者ゆえ一
失あり。愚者も又一得あり。某博士ありて南海に奇虫あり。人その名を式
蜻蛉と呼び一名式蒲童といふ。その形蟬に似て蟬よりも小さく子は蝦子に似
て。みな草の葉の上に著。或いは虫に似て色青く光あり。池澤林中に
生じて。蒲葉に集まる。人母虫の血を取て殘八十一に塗り。その子は血をとり
殘八十一に塗り。子を留て母を用ひ。母を留て子を用べ。あのづから還るといふ。
こは仙術なり。財をとるべき式男女の道に用ひてその奇
特殆測るべからず。ゆえに式蒲童と。某件の虫を見しに。彼蜻蛉に似たるに

生ずとてより年あまり。拙くとも式少女子の業なり。その故難ぐ
それどもを才三郎が口まねでもふくべき駒を愛惜せずかその親猪平が素生式
留ぐ。忽地惑ひ釈ると見べ出ん自然と才を離れ往方もなくぞなりしてい。
蜻蛉媚茅の雫に似たり。いとも不思議のことと正首に疑示せば才伴頻に
感服し小桔梗も才三郎も耳新なる心地して。古式振ふぞ牧村長通再て
ふたり。集てる木まで火のつく易しと世語るといへば弱官に妻子の械を語るに。
中人以上ならば式なりとて小桔梗はまぐさまぐさぐべ。猪駒を名づけて女兒
今茲は既に二八ようりぬ。さるを式なる式といへども容止人にまさる心ざる仇なるぞ。
外戚なるべし従者どもに才三郎に妻せるべ親の安堵を下れ。ふたりとも皆ちうべう
とひもぐこのよ守猪駒しかん許あらば遠うるぞ猪駒をおろ出とべ。
るいうるとひもとひ入りて問べ。なるべ親子に式に教べ異式のこと式

送ひしぐオ作ハ感謝よ法ゞ通家うゑとゞの某ハ一僕ゞよゐ使つゞ形ゞよゞの
浪人うるよ守の家臣牧村ゆ。愛女ゞあゝ。オ三郎よ妻せんといろゝハ嘗ゞゝ
うるよゝそゝとゝて推辞び嗚呼よ似ゝり。とゝくバ又小桔梗も。欲び面よ見
ゞゝく。根木よまゝうる杪木色ゝ駒とゝゝく活駒と迎へゞ石弦りて玉よ代る。
そゝとゝまゝ世幸ゝらゞ子ゝとゝそ満足ゝうゝめ。ゝいゝとてオ三額弦拑
ゝひゝけゝうゝ縁淡ハ麗囹ゝる某と。愛さゝゝ伯父ゝの賜ゞとゝかゝゝ家ゝる
父母のゝゝとゝろよゝゞゞと。ゝゝ弦ゝとゝゝゞ長通ゝ。欲ゞゝ限ゝゝゝ。頓の熟談
いゝゞひゝり。巡歴もゝの地のゝ。翌ハ稲ゝゝゝ立ゝゝゝく。婚縁のゝゝゝゞゞゝ
うゞ活駒とゝゝゝゝ遅くゝゝゝこの秋ハ過ゞゞ。ゝゝ退んゝゝ
ゝる弦。ゝゝ親子ハ推留め。頓のゝゝく果敢ゝゝ。欲待ゝゝゞ長柄の
年魚ゝゝゞゞゝゝ藤川八艶の素焼ゝゝ弦殺よ今一度ゝゝゝ人ゝ盃と

勧まゐらせば。長通ハ頻りに辞みけるものにかゝづらひて。とにかく虚々日を暮し。君命を
外にせバ大なる不忠之。爰に於て後日ハ受んさんとぞ。漸て其月を記し。従者ハ皆〳〵そ
がんつ遠しくぞなりける。さる程に文月の星を枕とるにしもぶる此尾花牧村が
婚縁の事。彼此に風声せしかバ。お駒ハこれを傳聞て。忽地に胸塞り。親を
恨み夫を怨む。姉との媢やむせるがく。引提の水も湯となるまでに涙ながらく
涌へる。彼谷汲の滝乃糸よりきるゝ如く。又父に結ぶよしある妹伕の縁。夫乃
かくりくなりしや。岐蘇をかくらひて。身の憂る事告る尤も遂にその甲斐なき
のこゝろで胡慮にぞうらんされバそそ又彼女の。なげきハ殊にまさりし
花といひむけしりと嫁娶を啼くぐるまもうしてきれに川一條のとゞまりよの。ふ義
きげにえるべきと死だやと思ふのみ。起臥も足ちくかりく。長き病著になりし
かバ諸平を女兒がおもひわそる。病根を精しく。里の醫師を招けども草根木
皮の効なきのみならず。佳婿を招きえずバ。彼弱冠ある志を遂て。お駒が病ひハ本
復まじべしとはじめより尋思しく。竊に斧に説きかせ招婿のことをいひよすまま
まさしうなきをもぞお駒がある事ハ一層の物思ひとなりにしかバ。是より絶て粥も喰ず
ますず。医師を匙ととりて逡巡のまゝすぎれバ。諸平も是に驚きて。同郷他郷の
選逸を嫌へど。世の人のよしといふ賣薬さへに求めつ。是彼と用るに。大往生に
その名やのえし。神女湯を用ひしより。お駒が病著おこたりて。素粥ようやう
味ひをおぼえきのいはそふハ血色も雲間を漏る月に似たり。富に湊ふて物を侮る
諸平も流石に良薬の効験に我を折て。又ひともなき是の用ひり。投この薬今も
ありし例の寓言にあらず。因にこゝに効能左の如し。

家傳神女湯　一包代百銅
取次所　江戸芝神明前　いづみ屋市兵衛　大坂斉橋筋唐物町　かわち屋太

右の薬ハ余が先祖信清斬の傳ふる所。婦人諸病の妙薬にして。殊に血暈に即功ありて

余は手て凡五世家に難産夭折の婦人ありしとなん。但し薬種は極品を採り製方の容易なら
ざる紙めて推弘ることあたはず近ける人のもとめに任せ功能相わかして世にひろうせるのみ。
一第一婦人ちの道に妙なり○頭痛めまひ立ぐらみするは○婦人物まどひひろし物わすれせしたく
度々あくび出て。餓ようなりとおもひ或は抜けたりて目の見えがたく打ちどうらは。
或は手熱往来ありてとある人或はむねさわぎ又は不食まろ亦皆瘀血のなすところなり。産
用ひて只一貼にして即功あり。正に是神女湯の名空しからざる紙しらん。
一産前つねに用ひれば安産し産後にはやく用ひれば悪露をくだし血をさめその乳汁能くいで。
母を安らかにし子をまもりまた孔子なき婦人常に用ゐれば肉を補ひ衰に懐胎すべし
産の婦人絶えず用ゐるときは亦元肉を補ふ故に血虚崩漏等の患ひあることなし。
ちのみち腹中かわれるは下腹の冷るには総かどの気ひ酒の宿醒には打身には物に
ふれてにとりのぼせるによく気絶しづめ血をおさめ體を丈夫にすること妙なり
まづ月水不順のときも早く是を用ゐれば肉を補ひ血を養ひその人経水つねのごとくなる
べし。但し経水久しく不順なるは又は腹中に瘕ありたるは又散薬あり。其外婦人諸病によし。

精製
極品
奇應丸　一包二百粒餘入代銀朱○中包五十六粒入代弐匁五分○小包十二粒入代五分
一粒六文づつにうるとも一包八十粒よりも若し上中小但五分の下小売り不仕候

きおう丸の功のみは世にあまねくしられたれば是亦くはしく紙ひさくもあらず。その可否は論ぜずとも知るべし。
薬を紙えらむにはまづ○ようこと偽薬口伝ありて辨じがたし是をよく真物は其價貴き故
あしく貴薬によりてまづしの製方を用ひて薬種に上品をえらぶことはまれなり奇應丸の名あれども
どのきおう丸の功のみはまつたく何の益もあらん今わが家に製するは加減の一方にて薬種の
價をいとはず製方をきはめ真物をえらび分量をくはしく法にまかせて調合するゆゑに是
よのつねの奇應丸に比すれば其効百倍万倍にて功能かぞへがたし別冊に記せる凡大人小児の万病
即効あらざることなし奇効妙應諸薬に勝る。ひとたび試みて精製類なきを知るべし。

○つぎむしの妙薬　女人毎月つぎむしになやむときは人によりてつぎむしに
つよくいたむらくものありこれを用ひて極めて妙なり　一包六十四銅　小包三十弐銅

右調合弁に弘所　江戸元飯田町中坂下南側冨みせ高　瀧澤氏製

坎為水　めしみの駒

斧丈八ハあなどりより、お駒をいぶせく思ひしを絶てその気色を見せず。斧ハ陽に実
ある父楽が病著に臥てより、昼ハ終日看病し、夜も又とけて睡る事なく抱太さ
ず、されバ諸平ハいたく欽びて、婿とりの事をも只妻にのみ相譚しぞ斧に
安からぬ思ひあるべしと応て、窃に丈八に告し、丈八ハ悦て眉根を
よせ、これぞ原お糸を香餌にして、この家に身をよせ、庇を借て母屋を取る
留月に計較ある態見けるにぞひかけざる。それ女児ありて、婿養子を呼とるのを
みるくぞ婢の糸ぞうる誓穿鑿へころがるまべく凶祥え、いかで謀を回さざれバ後悔
とふ手ちがへとて、口ハ彼息女を詭欺て自滅をとらせんと思ひ、その計策ハ箇様々々。
とあるびかゝふ説示せバ、斧ハ頻に点頭つ。婢の便宜を候ひ、お駒が病著にかくてくれぬ。
かくて灸治ばかりあるにて医師がきてくれど、むしろ小ぞ斧ハ不便を忍て意中窃に
歓びさて、お駒ハいよ／＼その灸治ハ始るほどによりて殊更に痛きめの、吾俤抱去てある、
せん頃日の油雲にくい、といふ頻暑にも下屋にハ怯ぐるかゝらん、いざ揉摸てを誘引つ
火を切艾炙皆机に蒲団うち掛て当坐だかりの林臭龍挺の新聞き灸秘燈の
昏の月景に層と背から襟推さげて火をうつせバ、お駒ハなまじくまにぞ否といはれず
いる妻の終に滅るんとの世から煙となりて立のぼる孫陀の丸圏にさされたや
三途のかへさりと思ひ入りてぞ牙関る襦半の袖の紅葉鮮生て焼るく阿鼻晃焦熱
かゝやと思へど見る目も背後から慰て、やよ、お駒よそが袖ぞ怯え女子れ病ひへ
うましく心より起るにそ、お糸が病を推量まバ、尾花才三郎といふ風流郎が
積とふるりぬ生ぬ中でも女子ども母にさへ三遍しかも、ころりめうるゝ事ハ
送にあひおかるをまゝの浮気後遂に夫婦まるるを世にあざりて況や是ハ靡き
よりぐめう此に生云月て親の許せし妹伕の縁し結ぶくひるて引裂まし才三郎へ

まだ花のいでまで俄頃の婚姻を外よ聞く才三が恨病ならんと思ひしを理
丁二五百余むしの少女までも。かゝるとあらんまでつら沿夫へ面あてに他夫を
あしらへしく奔て浮気なる鉄ぞ思ふして近寄らば今我ふ証する
誠を娼し嫌て湖底へ身を投めらく。死ぬるのやおらんぞらん。といひつゝ泣もあへぬ
お才がその意地もなく。阿容とうつくしきをかぐるが傍にもむかひ火をつくる
むのまゝに灸押らまするに痛さするに堪ねお駒は忍びやへと淤血を吐く紅丸粉薬
振こぼさる彷彿なり。灸治をせずで果るとぞえきは河原へ入船橋に東走の
つ。嫁入道具の今年もまじく出て行よと総角が罵で散動光景に吉駒は吐嗟と
目を過すれば是も堪ゆ縊て一声ばくと泣よなり。その人斧は擲子の簾釣て驚
嘆しある彩しき掉の数菖竃長櫃屏風の皆おのおのごろある油箪しくまくれ
正しく屋敷が宿所お駒お才もとく出て。遠山なりしとと見ゆるや嘆ひたびせ

行燈紙引提く下屋へ階子の中央よ禅の先ぐ紙窗稿ゑいる丈八ぞ入らず泣沈む
お駒がなにとりへ餘するよ小隙紙よせ顔を覗きて嘆息いくつ劬労を喜ぶ訝ある
嗚呼よ似くいとうおげまをお熊さん五百倍も息子ともきゝとれ若し紀
恋をせざるよあらぬ才三を摘りのよおらざりせばいろでる人の痛き紙あるべき
さもるバ又母御前継し紀心一息ろくておん才よ見ゆ紙遂さまら給すがもがなと
人なきまぞ某よ相譚あふ是も又黙止がたしいりまのせますとあふ折今釣しそと
猿井へ赴く稲荷小堀橋のあるさまて才三の家ふ由紀あすなり。知己なる縁を便び
かけく人なれるよ招れよせおん才よろかりて恋のかぎり理せめで述しかば
彼人ぐよ嘆息し。ことと又異妻を取るべきはあらねど親と伯父すは背れ
ぐて当坐脱まで峯引しが婚姻をれや近くなりぬなるに和殿のいふところ
真お駒が志なたあらば是一旦は渠を伴ふて早く新紙隠さへし。翌の夜必すぐ

橋のもとうとと出ぬと密かに侍へ立ちくゞ絆の紋一毫うりとをうばかてうらうん
とゐへどことでいそ出も術已吾妹子ゐ志ぢきに等しゐ見めうらぶ和歌貝く
計ひく。何よりまづ正しく証拠式今宵竊に入んせゐ媒妁と憑むいとこちゐ人
入りくいゐをーうぶ某軒く業引く忙しく別きゐ三十六計逃る紙上ところ
ところくいひとちゐ人一旦家出の怨よあふとを他人外ぬ女子の若郎後衢
解ぶび夫婦ゐろ在ろへさをんゐ必定ろう。家出よゐくきあいゐ真ーせゐふ
密祕ぶ恋よ乙の素きつ。いとで我ひーー小女子ぶいと汚ゐろふと計られて多地よ
阿式槿原来ゐぶ使ゐ行をかを心ゐうでとゐせう式紀ぶとゐ悔ーさよ片山
里よ蛤蟆て穂屋の薄よ雨夜式忍び。垂水を辞きゐく炊くことを情郎よ添邪
ぶび何ゐ恨の付ゐべきさゐとて独て忙しく灸治の点を落ーゐ硯箱式引
ゐく。懐帝式推ひきその夜のゐ外ゐる式さゐくくと書ゐく巻ゐ。彼八犬乃

袖をとう出く。袖よ引包こやよ犬八書と衣と式潛ゐ。彼ゐーよ遠手てよびかる
袖八二ゐあゐりやその夜ゐ式帰ゐるとをゐ又ゐも模様も等しく式この八犬の
衣を被く。畏懼まく侯付ゐくとゐ二ゐの衣のゐ外三のゐもくゐりくまゐ。
こと又ゐまくゐる證据ゐ乙ゐゐ式ゐでゐと視示ぶび犬八こと式受とゐく懷推
八ゐ。背潛子ゐり退りけまさる役よ犬八きその夜人定まてゐぶ傷よ知ゐ
ける小厮岐義を呼び呼ゐとゐよ岐義八寝忽て岸破と起走りきんとーゐ。
犬八笑ひと呼び抱き縮ゆくさていふせう。店の長ゐるゐぶ呼ゐ人とゐ人ぶ式
うゐるまーぶ汝八主の今愛と二の日来ゐり情由ゐまーとを。いまぶ本意ゐる家ゐ
と式人もゐまーびーまーとゐる天知り地知り主人もゐくーび意よ汝ぶ方ーーゐうん
といゐまーく岐義ゐ忽地よ呼きを目子を睨ーまつ。否ーとゐろ小口隠きびーー犬八。
いよ声ーと細めーゐまーとゐ人の子ーいーぶゐ情ゐる。傍輩を狀ぶべき我ーゐくと

そと取る。件の艶書を披きて見るに、紅人を召して俄頃に一筆書かせ給ひ、
「まづ外房と共にまゐせ給ふとのたまへ。夫れ、あんずるうちもどやとい
捨ておとこの鬼ぶるまでを使ひ給へ。世の苦に堪へ素ろ孔雀ひ給ひ。
翌の夜は堺橋のほとりに、ふるく候ふ。この夜乃袖はこの衣とおなじ色の紙
被つるめ是則ちしるしよ給ひ。野干王の烏帽子をこそ紙撒に怪しこで。
とく来て迎とり給へ。月ごろの恨をひいそ紙亳に弾ぶ。そは面ひ小こそ
と書イ。恋ひ紙君へまゐらせる。陳平駒と幾回か続くしてこうちいくこと
巻こそ〻こそ用紙溢るこでろ小矢片向ひ。春秋の薮入に雑劇ぶ人イ
主官はとそかく底意地ところ〻。或は傷葷の色情を妨或は宝物を撮えて
虎嶺小蘭ところめどもなる小抑つ〻この紙ばは大八ゆ也の哀をくこそろて。
かくまで遠の徴ぶまこる儔平ろる主官なれよりやる紙十年乃年朝を化

媒妁せよ。といふ。しかはあらじ。呆れて回答を待せ給ひ。痛ましさも
一下ならずゆゑ。こゝてよりめの思案紙ろ紙付の過失は誰もかくこそある
べけれ。枝に薬て花を散さば後悔そこ小立ぶ。ひろ紙遂させ進せん。と
涙流さる活ひ。ろ。まづこを紙見こと。ろ紙ぶ。と密語ぶ。ひ丈の衣と
書き紙端をひ。ぶ岐義はこれと使のあくぶ天に歌び地に歌び反燈蓋を

務しく。宵と毎月焼餅流球芋は買咲ひと生涯忘せぬ方をあまと刺被施
布子の襟と跪ふ風あろ共才と殺しても恩紙報ざらん現ろだの
産ヨ天いとをこかとて。道と頻首再拝ちやくしく。綿のこぶるく貸蒲団一布へ
形雑く今ろろの。お死ぬろきまでと跪くけそ嗚呼しけきくめた芸ん丈
八ふる紙抗く目注し。施く尾燈さくち掩ひく。彼と睡らせ紙を外ろ。結
ぎと岐義八明るまで睡らんとところふいを寝らきと。結旦ろ孫をあらで。
人ろり先と起くをどと何せんさべめるよつぎお臣。道まあく孫だ動も
忙しく。人や紙をのびくつ。今宵夫と仕きんと准伯紙をるめくらむ。ハ
親と巣らきつ。今ろ親紙捐てゆ。罪を報を過世の約束許こせてまへと
白地小沼勧解ぬ勲死ろ不深ろう。かくくその日は亭午ごろ。ぎひけるく
復塚ろう。岐義が母清茶と。折ろ。店まあ。諸平。丈八岐義も伯り

あるじの母親周柴は草鞋を脱て母屋へ上るまで岐義はこれを見送りつゝ
母はもいつかなることあらんと今時のうらむ来まゝ〜るゆる役目と呼び周柴ゆゑ
うち微笑てゐるく母ゞ子を訪ふまでく来つるといひいせで外なるへこゝ孫ゐるど
いろまで童であらぶことを丈夫ひとりのみなりひとりぬのいひざるまごゐるまでも
と寒やくあるゝ對ひ中稔めのとく嫌ゐあるど目うぐ使ゐなるうぶ子の為
ふゐ親うぐゝ面ぶゐるゐひなるどを〜ふゐ岐義が刃の暇をあつらへとて来りし
といふ岐義ゐ繋ゐ紀く丈八と貝紙注〜主の回答紙ゐをまこでゐひゐ孫つ
小膝と推向ゐ母は何ゐる家ふ十年の年期ゐ〜ゐを紀ゐうぶまなる願言紙
いうぐゐ聴ゐぎと阻む紙文ゐ孔ゐうぐ〜ゐ渚平ゐ對ひくゐいふゐ孫ゐる
ゐるゐ〜ゐ祝〜くゐぐゐるゐ〜ゐ結ゐ親の貪慾ゐく主ゐ不足ゐゐるゐ
渠ゐ総角ゐ〜ゐ比結ゐ〜ゐる婦ゐゐ〜ゐや年来ゐ〜ゐ岐義ゐ田金八

ゐゐ〜ゐ〜ゐゐ刃の貪〜ゐ黙止ゐ〜ゐ〜ゐの秋ゐ出水の
後徳田川のゐ〜ゐ〜ゐ不思議ゐ金紙拾ひ行ゐきゐゐ小郷ゐ〜ゐゐ紀
人のゐ〜ゐ行ゐ親の恥辱紙顕ゐゐ〜ゐ岐義ゐ紙舞〜ゐ〜ゐまゐ知ゐれゐゐ〜ゐ
元来渠ゐ山丈八加ゐ嶋山の麓ゐゐ猟夫復市と呼ゐ〜ゐ〜ゐ頃八天文〜ゐの
年如此ゐ〜ゐ〜ゐ合流林の芝生ゐ〜ゐ旅客紙殺ゐ〜と疑れて獄屋ゐ
ゐ〜ゐ〜ゐ宛枉ゐ命を隕ゐ〜ゐの比岐義ゐ乳名紙岐太郎と呼ゐ〜ゐ五歳ゐ河
ゐんゐゐ母ひゐ子ひゐゐの苦ゐ苦紙累ゐ貪〜紀ゐ〜ゐ貪く親子ゐ
ゐ命紙繋ゐ〜ゐ〜ゐ羽栗郡復塚ゐゐ妹夫雑魚平といふゐ家ゐ刃ゐ寓
ゐ紀年月ゐ送ゐ程ゐ一夏妹も妹夫も時疫ゐ〜ゐ刃ゐ〜ゐ〜ゐ家ゐ刃一個の女児
ありゐゐゐ岐義ゐ後ゐゐどゐ年ゐ二ゐの妹ゐゐゐ〜ゐ妹夫の
送ゐゐゐ則岐義ゐ増ゐ定ゐ〜ゐゐゐ遺ゐゐゐ〜ゐゐ物数ゐ

うる農家うちう孫べ西三年なりとせよそく。岐義ととくまわらせろ死ろるふ
皇天人と殺さぞ。徳田川みくもハうケヨ。十二金原紙拾うせめんどうちと
もうまぞ。彼の逃村長へ告守。祈件の金紙献上ム送せ〜ろ。鞍の手紙経
しりとふ人えうぞ。財布さ人朽をせぞ。秋霜信女と呼ぶる経木ふ金義拠を
ろる。文字うぞを消失ぞ。ことをその金の主ろ。ふ人ろうをぞ形のぞく。
金紙五倍ようビ物ぬ。ろ福ある。ろうをぞ。ぞ岐義と呼ぶ。
濁水と夫婦ふせよわ〜く。いそ〜く。ろ。ぬ。ろ。ぬ。ぞ。ろ。ぬ。ぞ。ろ。ぬ。ぞ

繹の首尾をよく澳水よりさらせ四人五倩は後より加てらやをとりてを
母は諾ひご諸平を呼紙うち掉て貴いそげと世話をいふ何ぞ躊躇ての
わづき衣裳櫃は馬に負しく母ひろ共ひとくゆをとそひの外ふいそぐされて
岐苑はさぶりくつ立を懶く今宵のう仇なりぬとうち歎くこへさ拓
どを主は只怖乱つるる癖うまぶ遊く小厠を走り出る岐苑が弟小荷駄を
催せ繹連よそのふまぞ間柴はあるぐと丈へ小ふ訣びを述別紙告ぐ子といそ
ぐ馬を牽しく復塚へゆる程ふ岐苑が計較齟齬て途ろ脱るとをかるうまぞ
阿容こと伴まて羽栗郡へ赴きけるを後ふ岐苑紙失ひ丈
八ぐ背門へ出る紙初つけく立ぐら謀の成らざる紙只管ふ悔うるぶ丈八
驟ぐ乱るまうく岐苑がうは惜むふ足らぐ立ぐらぬ丈おのふ出まぐ
ちん沿ひりく彼息女ふ向火を燒つけさせとまてくを沿死ぐられ又

ふりくそのに絶き岐苑を流欺く這奴と小女と堺榜へる紙跡ふり
跟て出る矢庭ふ搦ふり突落さぐ推ら情死とそふざらん初て思を
攘んとそひふけとど今は甲斐ふるふ。かるうもあらんと豫てより忍びの
忠紙除くのこうで四五十金の徳もつくなりぬ任してもるるをいとを
ぬとげふ密語ふぞ斧は頷ふうち立ぐ只管その智ふ感伏てそぐまふ
立別をそりぐる程ふお駒は今宵走らんとおもへば曙のこうち驟ぐ方さへ
心の疲労ふそその日を既ふ没る比ふり俄頃ふ痢ふさ結ふ丈て業を
振り歯を切ふ絶く黒白をさらぐ驚死く医師汗
小厠を走らせ斧ふを已ふ紙沿ぐ足方枕方ふ集合つ盧宅斉一ふ抱
ぐを立地ふ沿らぐ。減条茶餌ふ臥さぐ睡らぐ裏皆その夜沙

明〜たり。かく八ゝ駒八ゝらゝど〜〜く。禍を脱き〜。この夜よりて丈八介が奸計八
その的外きく。ひどりゝ焦燥ごとおりひがけるゝ孔大病ゝ扁鵲ゝ術
又又ゝ施さぐき術をゝ〜。かくてお駒八次の日ゝ寂些おこゝりてゝ
ゝ足ゝゝゝゝゝこの付まぐを丈八ホゝ詭欺きゝとゝ一点ゝゝゝゝ才
三郎ゝ物束ぐ〜。その夜ゝ後き〜病著のゝゝ紙ゝゝゝゝ恨めどを
既ゝ暗号を措てゝ又いひやゝんゝきゝゝ口ゝこのまゝゝ死だやゝと名ゝ
拘ゝゝ沒ゝ死ぐ。病ゝ九両月あまり。雁ゝ渡る季の秋後の月ゝ
比ゝゝゝゝゝゝ又生憎ゝ肥ぐちゝゝ。

大嶋
大野州宇陽昌

美濃舊衣八丈綺談巻之四終